

## オランダ紀行 ～フェルメール全点踏破の旅～

(17期 小島 敬)

【2023年5月7日～11日】

ホールン<東インド会社時代に栄えた港町>、アムステルダム（国立美術館、ゴッホ美術館、アンネ・フランクの家、海洋博物館）、デルフト<フェルメールが生涯を過ごした街>、ハーグ（マウリッツハイス美術館、デン・ハーグ美術館）、ライデン（シーボルトハウス、ライデン大学）

コロナが怖くて、2020年3月以降、家族以外と外食をしたことがなかった。人が集まる場所へは出かけなかった。自宅には誰も上げなかった。公共機関の利用もやめ、ジパング倶楽部も敬老パス（地下鉄・バス乗り放題）も更新しなかった。

そんな緊急事態宣言下の我家に、「2022年11月、関西の箕面で17期・18期合同同期会（幹事：17期小間君、18期大西君）開催」との案内が届いた。あの大江戸温泉物語・箕面観光ホテルだ。金曜の夜に宴会、土曜に箕面大滝まで散策とのこと。コロナが終息していないのに、なんでこの時期にやるのだと思った。宴会で酒がはいれば酔っぱらってマスクなしで騒ぐのは目に見えていた。後で聞いたら、実際そうだったという。同期会は三浦半島・城ヶ島（2019年11月）以来の開催なので行きたいのは山々だったが躊躇なく「欠席」の返事をした。しかし人恋しさに我慢できず、土曜朝、始発の新幹線に乗りホテルへ駆けつけた。17名が来ていた。3年ぶりに仲間に会えた。箕面大滝への散策で互いの近況などを伝えあった。宴会には出られなかったけど、みんなの元気な姿を見ることができて素直にうれしかった。

2023年5月、オランダへ行った。首都アムステルダムで開催されていた史上最大規模の《フェルメール展》（2023年2月-6月）を観るためだ。17世紀に活躍したオランダの画家ヨハネス・フェルメールは寡作で、真贋の結論の出ていない作品を含めて世界中で37点しか残っていない。今回はその内の28点が、アムステルダム国立美術館に集まるというのだ。これはフェルメールファンとしては行くしかない。巣ごもりはやめた。コロナなど気にしている場合ではない。



【アムステルダム国立美術館】

オランダのスキポール空港に降り立ったら、誰もマスクをしていなかった。もうヤケクソでマスクを外した。オランダではずっとマスクなしで過ごしたが、幸い何事もなく帰国できた。5類移行（5月8日）後だったので、日本の検疫もフリーパスだった。

帰国後は、憑き物が落ちたかのように人と会い、外食をするようになった。

### 1. 金沢大学とオランダ

金沢大学はオランダとご縁があるのですね。2012年の金沢大学創基150年記念式典の学長式辞で「1999年に金沢大学が創立50周年を迎えた折、（中略）金沢大学の始まりについて検討を加え、文久2（1862）年に設立された加賀藩彦三種痘所を本学の淵源と定めました」とあり、金沢大学のルーツはこの種痘所ということになった。

1870年（明治3）金沢医学館が開設され、翌年オランダ人スロイス（ライデン大学を経てユトレヒト陸軍軍医学校卒業）が医学館に着任する。幕末前後にユトレヒト陸軍軍医学校などの卒業生10名ほどが日本に招聘（お雇い外国人）され、各地で西洋近代医学を伝授した。

1869年、明治政府はドイツ医学の導入を正式決定する。しかしオランダ医が講義した金沢、長崎、新潟、岡山、熊本、千葉（千葉のみ派遣されていない）は医科大学に昇格〔旧六医大〕したので、オランダ医たちの努力は無駄ではなかった。

スロイスの奥方がカレー料理をふるまったとの記録がある。誰が食べたかは分からないが、オランダ語通詞や医学館関係者なのだろう。金沢で初めてカレーに出会った日本人たちだが、これは「金沢カレー」のルーツではないようだ。

ライデン大学 (1575 年設立) はオランダ最古の大学だ。八十年戦争でスペイン軍の包囲網にライデン市民は最後まで抵抗した。この勲功に対し、ライデン市民がオラニエ公に望んだものは大学だった。当時、都市に大学があるということは大変名誉なことで、市民は税金免除という褒賞よりも大学設置を選んだのだ。ライデン大学には、後に世界で初めて日本学科が設置 (1855 年) された。

ライデン大学は人文系が強いと言われている。金沢大学人間社会学域はライデン大学人文学部と交流協定を結んでいる。2022 年夏には、「金沢大学ライデン大学学生短期受け入れプログラム」でライデン大学の学生 15 名が金沢へ留学した。

ライデン大学のすぐそばにシーボルトハウスがあり、シーボルトが日本で収集したコレクションが展示されている。シーボルトハウス内には、金沢大学を含む〔国立六大学〕欧州事務所が設置されている。係の人に案内してもらった。2 部屋の内、1 室は長崎大学国際交流室、他の 1 室は会議室。各機関が共同で利用しているようだった。

八十年戦争時の要塞は市内唯一の高台で、見晴らしがいい。高さ 10m の土塁の上に、更に高さ 6m の石垣が環状 (直径 40m) に取り囲み、要塞を形作っている。オランダは国土の 4 分の 1 が海拔 0m 以下にあり、どこまで行っても平らだ。今回の旅で登った唯一の山 (丘) がライデン要塞だ。



【芭蕉の俳句 (ライデン大学近くの建物)】

## 2. オランダ料理

アムステルダム初日は、東インド会社 (VOC)

の遺構 (本社建物や各種倉庫、計量所等) を訪ねる為、オランダ在住の W さんに、17 世紀オランダ黄金時代に栄えたホールン (アムステルダム北方の港町) などを案内してもらった。ホールンの港に面したホーフト塔 (1532 年築造) でお昼にした。以前要塞だった建物は、石造りの佇まいが渋い。狭いらせん階段を登ると 2 階がレストランだ。窓側の眺めの良い席に座った。僕は元祖コロケのクロケット (写真手前)、W さんは好物のパンネクック (写真奥) を注文した。見た目はピザだが、直径 30cm の巨大なクレープだ。彼はナイフとフォークで上手に巻いて切り分けて食べていた。

W さんによればオランダの名物料理にはウナギの燻製があるのだとか! ウナギは蒲焼に決まるとるだろう。ひつまぶしのおいしさをオランダ人に教えてあげたい。



【クロケットとパンネクック (ホールン)】

一人旅は気ままでいいが困るのは夕食だ。朝食はホテルで、昼はカフェの軽食で済ませられる。でも夜レストランのテーブルで独り食事をするのはどうにも落ち着かない。オランダ料理は想像していた以上においしかったが、旅先で割り勘する (go Dutch) 相手がいないのは、なんとも味気ない。

## 3. ヨハネス・フェルメール

中学校の美術では、オランダを代表する画家はレンブラント (1606-1669) とファン・ゴッホで、フェルメールは見たことも聞いたこともなかった。いつから教科書に載るようになったのだろう。

フェルメール作品の魅力は何か:

1) キリスト教や欧州の歴史の知識がなくても楽しめる、2) 市井の人々の日常生活が題材になっていて親しみやすい、3) 思わず引き込まれてしまう

寡黙で静謐な世界、4) 光の魔術師と呼ばれる技量、5) 引算の美学と称される計算し尽くされた構図、6) 画中画などに込められた寓意を読み解く面白さ、7) 贋作事件や5回の盗難などの話題性

現存作品の少なさ(37作品)も特徴で、レンブラント(1500点?)やゴッホ(約2000点)に比べるとフェルメールは際立って少ない。

盗難が多いのはフェルメールの作品が小さいこともある。《牛乳を注ぐ女》(45.5x41cm)、《真珠の耳飾りの少女》(44.5x39cm)。特に《レースを編む女》(23.9x20.5cm)に至ってはA4サイズ以下で、上着に隠して持ち出せそう。アムステルダム国立美術館の「名誉の間」に鎮座するレンブラントの大作《夜警》(363x437cm)が、大きすぎて誰も盗めないのとは好対称だ。



【牛乳を注ぐ女 (アムステルダム国立美術館)】

17世紀黄金期のオランダでは市民が豊かな暮らしを享受し、各家庭にも絵がふつうに飾られていた。大半は残っていないが、この時期オランダ絵画は500万点以上描かれたという。オランダが経済的に衰退していくと共にフェルメールの名も忘れられていった。フランスで印象派が評価され始めた19世紀後半、庶民の生活を描いたオランダの風俗画が再発見・再評価されることになる。

フェルメールは、半貴石ラピスラズリーを使ったフェルメール・ブルーで有名だが、フェルメール・イエローもよく知られている。《手紙を書く女》《真珠の首飾り》《恋文》などでは、色鮮やかな黄色のガウンをまとった女性が描かれている。

《牛乳を注ぐ女》の衣装も、補色関係にある青と黄色が使われている。

#### 4. デルフトの街

フェルメール(1632-1675)が生まれ、生涯を

過ごした街。かつて城壁に囲まれていた旧市街はわずか2km<sup>2</sup>、フェルメールは中心部のマルクト広場を起点に半径500mで転居・生活していた。

マルクト広場に近い運河沿いのホテルで2泊しフェルメールゆかりの場所を歩いた。デルフトは喧騒とは無縁の、とても落ち着いた街だった。

フェルメールの絵には静かな時間が流れている。でも実生活では14人の子沢山で、若くしてデルフトの画家組合の理事にも就任していた。

家業の宿屋兼居酒屋「メーヘレン亭」の経営もあり、多忙な日々を送っていたにちがいない。

絵が37点しか残っていないということは、子供たちがアトリエ部屋に乱入して完成した絵に落書きしたり、絵を破ってダメにしたりしたことが多々あったのではないかと感じてしまう。



【真珠の耳飾りの少女 (マリッツハイス美術館)】

フェルメール・センター〈デルフトの画家組合があった建物〉では全作品〈レプリカ〉を見ることができる。主要作品の構図の解説や実際のアトリエの再現など、フェルメールについて詳しく判りやすく展示されている。映像も流れている。

スカーレット・ヨハンソン主演『真珠の耳飾りの少女』(2003年)だ。この映画がヒットし、それまで《青いターバンの少女》と言われていた作品が映画のタイトル通りに呼ばれるようになった。

#### 5. ゴッホとフェルメール

筆まめのゴッホ(1853-1890)は、弟テオや画家の友人らとの間に膨大な手紙を遺している。

謎だらけのフェルメールと異なり、ゴッホが「誰の絵を観てどう感じたか」を知ることができる。

<http://www.vangoghletters.org> [英文URL]

ゴッホはフェルメールの絵(《デルフトの眺望》や《青衣の女》等)を美術館で観ていた。

テオに宛てた中でフェルメールに言及した手紙は10通(1882-88年)ある。最後のフランス・アルルからの手紙(1888年9月付)では、補色関係にある青と黄色について、こう書いている。

「この自然は異常なまでに美しい。何もかも、どこもかしこも。空の丸天井はすばらしい青、太陽は薄い硫黄色の光を放射し、それがデルフトのフェルメールの絵のなかの、空色と黄色の組み合わせのように柔らかで魅力的だ。」〔二見史郎編訳『ファン・ゴッホの手紙』(2001年) p. 286〕



【黄色い家(ファン・ゴッホ美術館)】

ゴッホ美術館は国立美術館と違い、カジュアルな雰囲気だった。《馬鈴薯を食べる人々》《花咲くアーモンドの木の枝》などが間近に見られて楽しい。フェルメールやレンブラントは生前有名だったがゴッホは、ほぼ無名のまま生涯を終えた。

川上未映子は初期のエッセイの中で、ポップな大阪弁でゴッホへの熱い想いを語っている。『『そら頭はでかいです、世界がすこんと入ります』(2009年)所収 pp. 96-100〕以下抜粋引用。

「私は、ゴッホにゆうたりたい。めっちゃゆうたりたい。(中略)今ではあんたは巨匠とかゆわれてんねんで、(中略)あんたの絵は、ずっと残っていくで、すごいことやな、すごいなあ、よかったなあ、そやから自分は何も残せんかったとか、そんな風には、そんな風には思わんといてな(中略)、今はみんなあんたの絵をすきやよ、私はどうにかして、これを、それを、あんたにな、めっちゃ笑ってな、ゆうたりたいねん。」

## 6. アンネ・フランクの家

1944年4月5日付『アンネの日記』

「わたしの望みは、死んでからもなお生きつづけること！」

オランダは第1次大戦では中立を守って戦火を免れた。第2次大戦時も中立を宣言していたが、ナチス・ドイツは宣戦布告なく侵攻し、オランダは5日で降伏した。ナチス占領後ユダヤ人は東方の収容所に送られ、多くが生きては帰れなかった。ユダヤ人のホロコースト生還率：オランダ(27%)

アンネの父オットーはドイツ・フランクフルトの裕福な実業家だった。ナチスの迫害を逃れ、1934年ユダヤ人コミュニティのあるアムステルダムへ一家で移住した。アンネ4歳の時だった。

オットーは食品会社を興したが、ユダヤ人の強制連行が始まると、事務所奥の隠れ家に避難することを決断。信頼できるミープら数名の社員に協力を求めた。厳しい配給統制下でアンネたち8人の食料を密かに調達するのは、並大抵のことではない。ユダヤ人を助ければ厳罰では済まないかもしれない。それでも、自分たちに累が及ぶことを承知で、ミープたちは命がけで支援を行なった。

2023年、このミープ・ヒース(1909-2010)を主人公にしたTVドラマ『正義の異邦人：ミープとアンネの日記(原題*A Small Light*)』が日本でも放映された。〈ミープは「ナチスから『アンネの日記』を守った女性」として知られている〉

オランダ名家の娘オードリー・ヘップバーン(1929-1993)は、アンネ・フランク(1929-1945)と同年だった。オードリーはアンネとは全く違う人生を送ったが、大戦後、運命の糸に導かれるように刊行前の『アンネの日記』の原稿に出会った。出版社の女性編集者が偶然にも近所に住んでいたのだ。晩年、オードリーはユニセフの活動に尽力し、その時に『アンネの日記』の一節(1944年2月23日付)を朗読したという。オードリーの朗読を聞いた人物は「まるでアンネ・フランクその人が語っているようだった」と述懐している。〔水島治郎『隠れ家と広場』(2023年) p. 164〕

アムステルダム初日の夜、「アンネ・フランクの家」〈隠れ家が当時のまま保存〉を見学した。アンネたちはここで2年間(1942-44年)、毎日怯えながら息をひそめて暮らしていた。コロナ禍による長期のロックダウンを経験し、ロシアのウクライナ侵攻が続く時代に「アンネ・フランクの家」を訪れた多くの人々は何を思ったことだろう。